

第15回作業科学セミナー 佐藤剛記念講演

## 我作業する，ゆえに我あり

近藤敏

県立広島大学保健福祉学部作業療法学科

要旨：佐藤剛先生は、1966年、労働福祉事業団の委嘱を受け渡米し作業療法士資格を取得。1970年の帰国後、九州リハビリテーション大学校の講師に着任。佐藤先生は、米国の医学モデルの作業療法を学んで来られたようであったが、その後間もなく、J. Ayres の提唱した感覚統合療法に傾倒し、やがてこの分野のリーダーとして長く後輩の指導に当たられた。佐藤先生が日本の作業科学を推進する切っ掛けは、作業科学を提唱した F. Clark が J. Ayres の共同研究者の一人であったことが大きいのではないかと思う。感覚統合理論と作業科学が私に与えた影響は大きい。日本感覚統合障害研究会が1985年に主催したワークショップにおける L. King（神経発達研究センター所長）の講演では高齢者の感覚剥奪、今回のセミナーの基調講演の講師 G. Whiteford が1997年、作業科学ジャーナルに掲載した論文では作業剥奪と投獄、2000年、作業科学セミナーでは A. Wilcock から作業と健康との関係について知ることができた。このことが、その後の私の教育や研究、趣味の充実に深く関わっている。卒業研究で作業剥奪実験、修士論文で集中治療室における作業療法といったテーマについて指導する機会をもったことも、また映画や格言、歴史を益々楽しみ健康を感じているのもこの2つの学問に出会ったからである。

作業科学研究, 6, 20-26, 2012.

### The 15 th Occupational Science Seminar, Tsuyoshi Sato Memorial lecture

## I do occupation, therefore I am

Satoshi KONDO

Prefectural University of Hiroshima

In 1966, Tsuyoshi Sato went to the USA to get an OT license with the support of Labor welfare project cooperation. In 1970, he came back to Japan, and became a teacher in the OT department of Kyushu College of Rehabilitation. I guess he learned the 1960s' medical model OT in the USA. However, soon, he studied Sensory Integrative therapy enthusiastically and led many therapists for a long time as president of The Japanese Academy of Sensory Integration. Tsuyoshi Sato also led Occupational Science. Jean Ayres and Florence Clark were his co-researchers in Sensory Integration for a long time. Theory of Sensory Integration and Occupational Science gave to me big chances. In 1985, L. King, the director of the Center for Neuro-developmental Studies, presented in the sensory integrative therapy workshop about sensory deprivation of elderly people. I then read "Occupational deprivation and incarceration" by this seminar's keynote speaker, G. Whiteford in the Journal of Occupational Science, 1997. In 2000's Occupational Science Seminar, A. Wilcock presented about the relation between occupation and health. These concepts support me to lead student's graduate paper and master course student's paper. Also, I can enjoy my hobbies, for example movies, proverbs and history more than before it and feel health and well being.

Japanese Journal of Occupational Science, 6, 20-26, 2012

デカルトの「我思う、ゆえに我あり（英語：I think, therefore I am, 中国語：我思故我在）」は哲学史上最も有名な命題の1つとされています。彼は、自分はなぜここにあるのかと考える事自体が自分が存在する証明であると説きました。この偉大なデカルトの主張を拝借し、「我作業する、ゆえに我あり I do occupation, therefore I am」とすると、作業するところが私なのである、つまり人間を作業的存在として捉えている作業科学と一致し、このような表題にさせて頂いた。さて、今回、思いがけず「佐藤剛記念講演」の機会を頂き、一体どのような枠組みで、講演という作業を遂行しようかと考えていたところ、株式会社ケアプラネット代表取締役の葉山靖明さんから過去聞いたフレーズを思い出した。「過去の作業を思い出、未来の作業を夢という」、作業の魅力を多くの人に伝えてくれている彼ならではのフレーズである。これをもとに1) 私の過去の作業、2) 私の現在の作業、3) 私の未来の作業という組み立てで話しさせて頂くことにしました。

### 私の過去の作業：思い出

これは佐藤剛先生との思い出ということになります。佐藤剛先生は、1966年、労働省の外郭団体である労働福祉事業団の委嘱を受け渡米し、作業療法士資格を取得。1970年の帰国後、労働福祉事業団九州リハビリテーション大学校の講師に就任されました。私は、その時の学生の一人です。当時のバルガス学科長は微笑みながら、「女性達には残念ですが、既に奥さんがいらっしゃいます」と紹介されました。少し遅れて奥様の佐藤デイルさんが赤ん坊をつれてこられました。同期の女性達はベビーシッターをやっていました。当時27歳の佐藤先生の印象としては、大柄な体格、穏やか、優しい、甘えん坊、バス



佐藤 剛 先生の若い頃 (29 歳)  
(於) 九州リハビリテーション大学校



ご家族とパサディナ（米国）の自宅前で（34歳）

ケットボールが好きでした。佐藤先生は、米国の還元主義的作業療法を学んで来られたようで、腰痛症や切断の作業療法を教えて頂いた記憶があります。職業前評価もご自身の好きな領域であると言われたことがありました。

佐藤先生が授業で紹介した16mmフィルムでとても印象に残っているものがあります。大体の内容は次の通りです。

### OT promotion film "Target" (AOTA 制作)

自分が運転する車で交通事故に遭い、自分のこどもを亡くし、外傷はないもののショックと罪悪感から上肢を動かそうとしない父親が紹介されました。この事例に対してカンファレンスの中で医師から、「作業療法士にまかせよう。あなたの武器である作業を使いなさい」という指示がありました。担当作業療法士が彼の車いすを押し、作業療法室に向かう途中、彼は窓の外の花に瞬間をやりました。その瞬間を作業療法士は見逃さず、車いすを止め、咲いていた花を一輪摘んで彼の目の前に差し出しました。すると、何と彼はそれまで動かすことのでなかった右手をゆっくり伸ばし花を取ったのです。この偶然ともいえるワンシーンを利用し、心と身体を動かした作業療法士と作業の力を思い出します。

1976年の1月か2月頃だったと思いますが、私の勤務先の長崎労災病院に恩師である佐藤先生から九州リハビリテーション大学校の講師にならないか、という電話がありました。考えたあげく、佐藤先生の元で勉強できるのなら安心だと思い承諾しました。そして米国留学の機

会が与えられたまでは良かったのですが、私の帰国を待たずして、佐藤先生は、九州リハビリテーション大学校を退職されました。私はだまされたのかな、なんだ、私は佐藤先生の後任人事ということだったのかとようやく気づきましたが、後の祭りです、とにかくなんとかやっついていくしかない、と頭を切り換えました。

佐藤先生を語る上で感覚統合療法を避けて通る訳にはいきません。1976年、佐藤先生は、日本初の感覚統合の理論と実際の研修を企画されました。講師は九州リハビリテーション大学校顧問の Violet Huerta 先生で10日間の研修会でした。この後、佐藤先生は、九州リハビリテーション大学校を退職し、米国に戻って J. Ayres のもとで感覚統合をしっかり学ばれました。カリフォルニアで佐藤先生が研鑽されている施設を案内して頂いたこともあり、やがてこの分野のリーダーとして長く後輩の指導に当たることとなります。佐藤先生の日本における作業科学推進の切っ掛けは、作業科学を提唱した F. Clark が感覚統合療法の指導者の一人であったことが大きいのではないかと思います。

1981年、日本感覚統合障害研究会が設立され、初代会長に佐藤先生が選ばれました。佐藤会長の国際的人脈により、1988年、国際感覚統合研究所と日本感覚統合障害研究会の共催で、国際感覚統合会議が東京で開催されました。この時の基調講演「アメリカ合衆国における感覚統合療法の歴史的考察」が F. Clark で、ほかに S. Cermak や S. Young の特別講演がありました。日本感覚統合障害研究会は、多くの研修会やコースを開催していましたが、学習障害児を対象としたものでした。ところが1985年のワークショップで L. King (神経発達研究センター所長) の講演を聴く機会がありました。「高齢者に対する感覚統合理論の応用について」というテーマでした。講演のなかで、感覚剥奪にとっても惹かれました。高齢者の入院、手術、安静、拘束、隔離が感覚剥奪を引き起こし、高齢者のその後の健康状態に影響することを聞き、私が指導していた特別養護老人ホームの高齢者の光景が浮かびました。初めて知った感覚剥奪でしたが、これは作業療法の大きなヒントになりました。また、クライアントの無力感は大きなストレスであり、持続的なストレスによって蓄積されたストレスホルモンは、運動や活動によって排泄されるのであって安静では排泄されないということを知りました。病気は病人をさらに病人にすること、ストレス・マネージメント作業療法もこの時学びました。この感覚統合障害研究会で学んだことが私の作業療法のベースになっているように思います。感覚統合障害研究会が企画した1991年の米国感覚統合ツアーでは、11名が

参加し、エアーズ・クリニックと米国トヨタ本社ビルの研究室で、F. Clark の作業科学の講義を受けたそうです。この時の参加者の感想としては哲学的な話で、感覚統合とは関係のない話であったとのことでした。

今振り返りますと、佐藤先生は誘うことの達人だったと思います。九州リハビリテーション大学校の教員に誘われたこと、感覚統合障害研究会に誘われたこと、札幌での第4回作業科学セミナーに誘われたこと(そこで A. Wilcock より作業と健康との関係を学んだ)、どれも私の作業療法士人生に極めて価値あるお誘いを受けたと思います。そして、この佐藤先生の築かれた道を後からついて歩いているようにも思われます。

私が、第5回の広島県作業療法学会(2000)の学会長を務めさせて頂いた際に、佐藤先生に「作業療法の理論と臨床」のテーマで特別講演の講師を依頼致しました。作業療法士の多くは、理論は技術とは違って臨床には役立たないと思っているようなので、是非、理論と臨床を結びつけるようなお話をさせて頂きたい、とお願いしました。佐藤先生は、「実はこのテーマこそ、自分が長年、持ち続けてきたテーマである」とおっしゃられて、快く引き受けて頂きました。講演の中で、次のように言われていました。「・・・率直に言って、日本の作業療法士の多くはこの理論と臨床との関係性を十分に理解しているとは言えない。またそれ以前の問題として作業療法の作業の理解が不十分な状態にあると言える・・・」という指摘を受けました。佐藤先生とゆっくりお話できたのは、これが最後でした。人生において人との出会いこそは人生を決定づけると思われませんが、佐藤先生との出会いはまさにそうであったと思います。佐藤先生の後任の母校の教員として、感覚統合療法や作業科学を学ぶ切っ掛けとして、常に作業療法士人生における大切な時期で後押しして頂いたように思います。

#### 私の現在の作業1：映画を見る、お葬式にでる、

##### 母の遠距離ケア、名言を集める

映画をみる：映画は本当に楽しい。映画をみて感動する自分は健康だなと思います。映画は作業の宝庫であると言ってよいと思います。

Watch with me～卒業写真(瀬木直貴監督、2007)、少年時代、淡い恋心を抱いた女の子が教えてくれた写真、やがて彼は戦地や飢餓で苦しむ人々を撮り続ける報道写真家になりました。しかし、がんのため余命半年の宣告を受けた彼は妻と故郷に帰り、写真集を作り始めました。友人の計らいで、写真家となるきっかけをつくってくれたその女の子を探すも既に他界。しかし、その娘に臨終

の間際会うことができました。その後、写真集は妻の手によって完成しました。彼の人生において写真はかけがえない作業であり、彼の死後も時間を越えた妻の作業となりました。

インビクタス *Invictus*, 負けざる者たち (クリント・イーストウッド監督, 2009), 27年間投獄された後、南アフリカ連邦共和国の大統領となったネルソン・マンデラには、不況、失業、犯罪増加など問題が山積していたのです。ある日、マンデラは、周囲の制止にも関わらず、ラグビーチーム「スプリングボックス」の試合を観戦しました。ラグビーは白人が愛好するスポーツでしたが、黒人にとっては、アパルトヘイト (人種隔離政策) の象徴で対戦相手を応援していたほどでした。しかし、マンデラのなかで何かは閃いたのです。スプリングボックスの白人主将をお茶に招き、白人と黒人の真の和解に共に立ち上がってくれるよう理解を求めました。それを理解した主将は、過酷なトレーニングを続けるなか、PRの一環で黒人地区の子ども達にラグビーのコーチをし、ラグビーの楽しさを伝えました。翌年、南アフリカ連邦共和国で開催されたラグビー・ワールドカップ決勝戦では、黒人・白人の区別なく、国民がともに興奮し、勝利の感動を味わうことで過去の傷、アパルトヘイトを癒す切っ掛けとなったのです。ネルソン・マンデラは、大統領として解決すべき多くの課題を解決するため、ラグビーという常識を覆す作業を選んだということです。

バルトの楽園 (出目昌伸監督, 2006), 今から約100年前の第一次世界大戦中、日本は中国でドイツと戦い勝利しました。日本の各地にドイツの捕虜収容所がありましたが、その1つ四国の板東の収容所での実話を映画化したものです。マツケン演じる会津出身の松江所長は、捕虜に対して寛大で、村人達とも親しく交流できる環境をつくりました。しかし、それでも脱走を繰り返す一人の兵士がいたのですが、松江所長は彼がパン職人であったこと知り、収容所でパン焼きの指導を頼んだことから脱走しなくなりました。いっぽう、松江所長の捕虜に対する方針が手ぬるいという批判が軍部の中枢から出始め、板東の捕虜収容所の予算が削減されることになりました。ところが、ドイツ人捕虜達は、その予算の捻出のために、力を合わせて山から木を切り出し、歌を歌いながら楽しそうに丸太を肩に担ぎ運んでいくのでした。意味ある作業や環境が人を動かすことを松江所長は軍人ながらよくご存じだったということでしょうか。

お葬式にでる：志井田太一さん (福岡県作業療法協会会長) のお母さんが亡くなられ葬儀に参列しました。その席で、お母さんの遺影が気になりました。両手を広げ

て何かを差し出しているのです。後で聞いたのですが、お母さんがお造りになられたお得意の団子を示されていたのです。遺影は大抵、その方の顔をアップしたもので、どのような人であったか分からないのですが、彼のお母さんの人柄が団子という作業を通じて感じ取ることができました。こんな遺影であつたらいいな、さすがは作業療法士! と思った次第です。法名 (戒名) も面白いものです。法名を眺めていると、故人の生き方、人柄、社会的業績を垣間見ることができます。三年前に亡くなった義母は、あまり出かけることがなく、縫い物が得意でした (寿光院縫空静心禅定尼)。十五年前に亡くなった義父は、町内の世話役で、碁が好きでした (浄信院貢空碁楽居士)。

母の遠距離ケア：私の母は85歳、宮崎県の田舎で一人暮らしです。入院中の夫と長年農業をやってきました。近頃、軽度の認知症になり、要支援1です。ガスの消し忘れ、薬の飲み忘れが頻繁です。このため、私は宮崎市内に住む弟と連絡を取りながら、広島と宮崎を行ったり来たりすることが多くなりました。母は、私達の心配をよそに、お仕事大好きでいつもイソガシイ、イソガシイと不満の言葉を発しながら動き回っています。私達はそれを制止するのをやめて、母の重要な作業と思われる食事の準備と家の前にある畑や庭の草取りをする、ことを支えることにしました。続・作業療法の視点～作業を通しての健康と公正 (Townsend & Polatajko 著, 吉川ひろみ, 吉野英子・監訳, 2011) において、作業の可能化に必要な10の技能をもとに母のケアを考えました。

[適応] 火事が最も心配なので、消火装置のあるガスコンロにしました。冷蔵庫の整理をヘルパーと私達で母の知らない間に行いました。賞味期限を遙かに過ぎた食品があるのです。買い物も同じものを何度も買ってきます。母は冷蔵庫に入れておけば何年でも保つと思ひこんでいます。古くなったものでも火を通せば大丈夫だと言い張ります。

[代弁] 親戚に今の母の状態を知らせました。認知症者は外面が良いので、母のきょうだい達は気づきません。実際、母と生活してみると、薬の飲み忘れ、ガスの消し忘れ、洗体を繰り返す長風呂、物盗られなどの被害意識を目の当たりにすることを伝えました。

[コーチ] 母が、草取りで忙しい、体が痛くなった、と言ったとしても、だったらやめといたら、ちょっとぐらい草が生えたっていいじゃないか、と返さずに、ご苦労様、ありがとうと言うことにしました。

[協働] 毎週、週末は車で1時間程の距離に住む私の弟が様子を見に行き、私は、時々母に電話することにしま

した。食材を時々持ってきてもらう店の人に母の状態を話して、注文が多いときは気をつけてもらうようお願いしました。

[相談] 母の愚痴、例えば、この歳になって何でこんなに忙しいのだ、自分は苦勞を背負って生まれたんだらう、をウンウンとうなずきながら聞いてあげました。

[調整] 母の顔写真を包括支援センターに提供し、徘徊の際、速やかに利用して良いと伝えました。

[デザイン・実行] 週2回、デイケアを利用することにしました。

[教育] 難しいことではあるが、他の人からの注意を受け入れること、ヘルパーを家に入れてほしいことを母に伝えました。母は台所は自分の城と考えているようで、鍋はピカピカ、他の女性がそこに立つのを嫌っているようでした。

[結び付け] ショートステイを体験させました。母の意に反して施設に入所させるよりも、自宅でこれまで通り生活するかわりに転倒や熱中症、徘徊、火事のリスクをとりました。家は離れた一軒家だったので類焼は避けられると考えました。

[特殊化] 畑に草が生えれば草を取ることを何十年も繰り返しているわけです。畑が誘っている、つまりアフォーダンスとして解釈しました。

これまでやってきたことを整理してみますと、離れていながらも結構、手を打っているという思いがしてきました。作業の可能化に必要な10の技能をチェックすることで、悔いを残さないケアができるように感じています。

名言を集める：プロ野球選手に、あなたにとって野球とは何ですかと聞くと、それは人生のすべてです、それをとったら何も残らないという選手が多いのです（他のスポーツでも同じ）が、サミュエル・エトー選手（FIFAカメルーン代表、セリエA・インテル所属）は、サッカーは私の義務だ！と答えました。多くのゴールを決め、黒人の誇りとアフリカの存在を認めさせるのだ、そうです。イチロー選手（MLB、マリナーズ所属）は、私にはやらねばならないことはない！という。打者としてより高みを目指すためにやっているすべてが願望の作業ということです。超一流の選手の言うことは違うなと感じています。

### 私の現在の作業2：教育・研究

作業が健康と関係することを理解するためには、作業を除去してみることで。私は、かねがね機会をみつけて作業剥奪実験をやってみたいと思っていました。2年前になりますが、卒業研究で、時間と体力のある若者な

らではの作業剥奪実験を行いました。古くは、ヘロン（1957）の感覚遮断実験が知られていますが、作業療法士による先行研究では、今回のセミナーの基調講演の講師であるG. Whiteford<sup>1)</sup>が、豪州の某刑務所での参与観察で、作業剥奪にさらされている受刑者達の興味深い行動を報告しています。以下は、私が興味をもった箇所です。

受刑者の日常業務ですぐに判る事は、受刑者は、工具/道具類に触れられないことです。自殺を考えたり、スタッフに危害を与えたりする可能性があるからです。しかし、受刑者に1つ明るい展望があるのです。水槽です。水槽には魚がいます。これにより、魚に関連する作業（撒餌や清掃など）を行う事ができます。受刑者達は、食事のおかずやタバコなど、彼らにとって貴重なものを他の受刑者と交換してまでも、魚の仕事に関わろうとします。受刑者は、午前4時半には起床して、着替えを済ませ、魚に餌を与える順番を待っていました。

受刑者との面談ですが、二人一組にて行いました。ただし、我々は、何かあった時のためにアラームを携帯し、刑務所のスタッフが時々、見回るといものでした。受刑者の多くが、この面談のために数時間前から準備を行っていました。受刑者グループの親分格の者が面談の順番を仕切っていました。受刑者は、しきりと自分の事を話したが、今必要としている事や必要になることに関して、意見を言いたいようでした。

作業剥奪が日常的にペナルティとして科せられているかのような刑務所ですが、囚人は何もすることがない状態を何とか打開しようともがいていることが分かります。文献ではありませんが、作業剥奪を思わせる事件が、新潟少女誘拐監禁事件です。事件発生9年後の2000年、19歳になっていたA子さんが保護されましたが、犯人の男の監視の元、二階のベッドから離れることを許されなかったのです。9年もの間、固定、作業剥奪、社会的孤立、時間的崩壊という過酷な環境に彼女は置かれ続けたことになりました。ただ、ベッド上で運動は許されたようです。窓の隙間から外の景色が見え、春になると桜が咲いた、と彼女は言っていました。この2つだけは救いだったと思われま

「作業剥奪が健康に及ぼす影響に関する実験的研究（井下紗耶、川口 拓馬、山口翔子、吉本愛美、2009年度卒業研究）」：作業剥奪が、健康にどのような影響があるのか知るところを目的に実験を行いました。対象となる協力者を募ることを考えましたが、まずは、自分達自ら体験することにしました。[対象] 本研究のメンバー4名のうちの3名（男性1、女性2）、残り1名は観察・インタビュー専任者としてしました。[実験室] 県

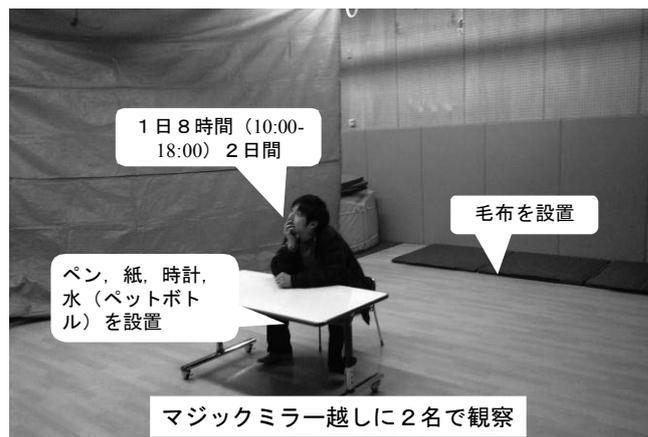
立広島大学三原キャンパス 4号館のプレイルーム (8×5m) で、観察室とマジックミラーで仕切られています。机、椅子、毛布、マット、水 (ペットボトル 1本)、時計、紙、ペンのみ設置しました。[実験時間] 1日 8時間 (10:00~18:00)、2日間連続、途中の中止可能。[注意事項] 対象者の物品の持ち込みは禁止し、実験の前日、当日、翌日は事前に予定を入れないこと、携帯電話については、対象者が日中は連絡が取れないこと、他者が電話に出る可能性があること (名前を伝えておく) を、家族等に伝えてもらった上で観察者が預かることとしました。[生理的欲求・途中棄権に対する提示法] 1) 昼食: 決められた時間 (12時) に用意した食事を提供した。食事が終わったら、観察者が食器・ゴミ類を速やかに回収した。その際、コミュニケーションはとらないものとししました。2) トイレ: 紙に「トイレ」と書いて提示してもらい、誘導した。その歳、コミュニケーションはとらないこととしました。3) 途中棄権等: 対象者が体調不良等で棄権したい場合は、それを紙に記し、提示してもらうこととしました。

[データ収集] 1) 実験中の観察: マジックミラー越しに観察者 2名で観察し、起こった行動を全て記録、2) インタビュー: 終了時に観察者が実施、3) 解放後の生活でどのような作業を行ったかを自記式で報告 (事前通告なし)

#### [結果] 対象者 A

観察結果: 全体的に活動性は低く、両日とも約 5時間ずつ臥床した。1日目はトイレに 1度も行かなかった。1つの活動が続かず、落ち着きがない。紙を折ったり広げたり…。他に、爪や髪をいじる、紙やペンを触る、折り紙、書き物、ストレッチ、マッサージ。観察者は、対象者が横になってから何時間も動かなくなったため、棄権させるべきかと心配になった。どの行動も中途半端にみえて、何がしたいのかわからなかった。

インタビュー結果: 「(1日目) やっと終わった。これから先の不安なことばかりが浮かんできた。何かをして気を紛らわせることが出来ないため、不安がより大きくなった。好きなこと、したいことが思い通りに出来ず、寂しさを感じた。この空間では寝るしかないという状態だったが、嫌な夢を見ることもあった。観察者に見られていることを意識してしまい、何をすることもためらいを感じた。トイレに連れて行ってもらうことも躊躇し、そのためにお茶もほとんど飲めなかった。」、「(2日目) 昨日よりでしたが、何をすることもためらいはあった。時間の経過が遅くて辛かった。することが見つけられず、時間ももったいないと感じた。鼻歌を歌うと気が紛れた。普段



は携帯電話が常に手元にあるため、それが無いと余計に欲しいと強く感じた。」

解放後の生活: 「普段より、ボーっとする時間は少なかった」、「携帯電話を頻回に使用した」、「普段は嫌々行っている洗濯や部屋の掃除をテキパキとこなした」、「音楽やテレビをずっとつけていた」

#### 対象者 B

観察結果: 横になるものの開眼していることが多く、寝ていないようであった。書き物には比較的集中していた。ウォーキング、1時間半机の周りをグルグル、他に筋トレ、書き物。観察者は、対象者がまさか 2日間ともウォーキングを 1時間半もするとは思わなかった。横になっても目を閉じているわけでもなく、何を考えているんだろうと思った。

インタビュー結果: 「(1日目) やっと終わった。寂しかった。特に、何もすることが見つからない時に不安や寂しさが強くなった。絵を描いていたときは集中できたが、誰かに見せたいと感じた。食後のウォーキングは楽しむことが出来、比較的長時間取り組むことが出来た。」、「(2日目) 1日目よりも時間の経過が早かったが、寂しさや孤独感に変わりは無かった。絵を描くことは楽しく取り組めたが、ボーっとしていることが多かった。後半は眠ることさえ出来ず、天井の穴の数を数えていた。今回の実験は実施時間が決まっているため、終わりがあるという希望を持って取り組んだことで安心感もあった。また、あらかじめ設定環境がわかっていたことで、事前に過ごし方などを予測できたため、不安が少し軽減したように思う。」

解放後の生活: 「友人を自ら誘った」、「朝方まで友人と飲んでいた」、「友人に、よくしゃべるねと言われた」、「普段はあまり行わない料理をした」、「5時間以上かけて実家に帰った」

#### 対象者 C

観察結果: 1日目は活動の転導性が激しかったが、2日

目は1つの活動への取り組み時間が長く、折り紙や書き物などに対する集中力は特に高かった。他に、ダンス、ストレッチ、折り紙、書き物、ペットボトルを転がす、爪や髪をいじる。観察者は、対象者がいろんな行動をしすぎて、次に何をやるのだろうか、目が離せなかった。2日目は1つの活動への集中力がすごいと思った。

インタビュー結果：「(1日目) 疲れた。家に帰りたい。時間の経過がとても遅く感じた。何をしたら良いかわからず、やり始めても1時間程度で飽きてしまう。頭が働かず、人の名前や歌詞など、思い出したいことがなかなか浮かばなかった。観察者に見られていることも途中までは意識してしまった。」「(2日目) 1日目よりも時間の経過が早く感じた。慣れ、自分の空間として感じたからかもしれない。折り紙をすることに楽しさを感じ、集中して取り組めた。しかし、眠気や無気力感に変わりはない。したいことが思いつかない時間帯もあった。」

解放後の生活：「心身に疲労がたまり、甘いものを購入した」「普段はすすんで行わない家事や勉強を積極的に行った」「普段から楽しみとして行っているインターネットをした」

今回の作業剥奪実験では、研究者自身が対象者となったこと、設定環境を把握していたこと、実験時間が決められていたことなど、完全な作業剥奪空間とするには限界があります。また、観察者に見られていることも行動に影響を与えたことが考えられます。しかし、このような見通しがある軽度の作業剥奪実験においても、作業剥奪状態は、不安や不快感、疲労を強く感じ、のんびりした楽な状態ではないことが分かりました。作業剥奪状態においては、作業を求めて様々な行動を起こすことも観察されました。解放後の生活では、作業の希求、活動性の向上、日常の作業に対する価値の認識という特徴が見られました。今後、協力者を募りより厳しい条件のもとでさらなる実験(36時間拘束、時計・紙・鉛筆なし)を計画しています。作業療法士を目指す学生にとって作業剥奪実験は貴重な体験となると考えられます。

「集中治療室における作業療法モデルの構築(益満美寿, 2009年度県立広島大学大学院 保健福祉学専攻 修士論文)」

医療機関においては、急性期リハビリテーションへの移行が益々進行しています。作業療法士は、急性期リハビリテーションで生き残るために集中治療室(以下、ICU)への参入を始めています。しかし、廃用性症候群の予防や補助的手段としての徒手の治療に終始し、OTの評価・アプローチを実践しているとは言い難い状況です。その

ためICUにおけるOTモデルが求められています。先行研究および現在、既にある作業療法モデルを検討した結果、ICUのOTモデルを構築する上で基盤となる4つの概念、すなわち感覚剥奪、感覚過負荷、時間的崩壊、作業剥奪を用いて、評価、介入のモデル案を構築しました。

目標は、ICU環境から生じる弊害を防ぎ、彩り豊かな環境を整えることです。このモデル案に、1) 賛同できるか、できないか、その理由、2) モデルのどこが自分の実践しているICUを説明してくれているか、3) このモデルを実践するための条件や障壁についてインタビューしました。ICU経験が2年以上の作業療法士で協力の得られた11名に対して、モデル案を事前に郵送し、熟読してもらい、研究者が訪問インタビューを実施しました。その結果、1) 12名中11名の賛同が得られました。2) これまで試行錯誤で実践していたことが、本モデルによって適切な学術用語で説明が可能になること、裏を返せば、これまで実践していたことを説明する共通言語を持たない状況であったことも分かりました。3) ICUでOTを実践するためには、関係スタッフ全員に共通する生命維持最優先のルールをなかで、物品の持ち込みやICU環境をいかに変更するのが課題でした。ICU患者は、閉眼しているものの必ずしも意識がないわけではなく、家族や周囲の会話をしっかり聞いていることが報告されています。これは、ICUを体験した当事者のインタビューが可能であることを示しており、今後、体験者の声を通じて、本モデルのさらなる検証を進める予定です。

### 私の未来の作業：夢

さて、私の次なる作業ですが、介護事業を計画しています。具体的には、デイサービスの開設でこれまでやってきた教育、研究とは異なるビジネスの世界であり、リスクを伴う作業に挑戦することになります。同じ作業療法士の娘達もやる気十分です。ケアではなく自立/自律をめざす作業リハビリ(葉山さんの造語)重視型のデイサービスです。長年、作業療法士として培った知識と経験、そして人脈を駆使して、来年にはオープンしたいと考えています。手の届く距離にある夢でありたいと願っているところです。

### 文献

- Whiteford, G. (1997). Occupational Deprivation and Incarceration. *Journal of Occupational Science*, 4(3), 126-130.